
誰にも話さなかった不思議な体験 4

加納 季里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誰にも話さなかった不思議な体験4

【Nコード】

N1715R

【作者名】

加納 季里

【あらすじ】

人が死ぬ直前、最後は誰に会いに行くのでしょうか？ 現世に未練があるとするば、何を求めているのでしょうか？
そんなお話です。

（前書き）

創作ではありません。 全て実話です。 そ
れを踏まえていただければ、 よりリアルさが増すかも知れません。

「生き霊」

21歳の頃、真司という友

達がいきました。

高校卒業後、就職先で同期入社の同

い年ということで仲良くなり、しょっちゅう遊んでいました。そ

の日は土曜日、朝から天気が悪く、今にも雨が降り出しそうな気配でした。

「せっかくの土

曜日だし、サウナでも行つて、ススキノでも行くか。」という話をしていたのですが、真司は当時、高校生と付き合っており「ゴメン、今日彼女迎えに行つてドライブだから行けないわ。」と予定を告げられたので、やはり会社の同期の正弘と二人で行くことにしました。

仕事が終わりに外に出ると雨が結構強めに降っており、私達は一度家に帰り、車を置いて待ち合わせをし、サウナへ向かいました。

「こんな天気

日に迎えに行くのもツライなあ。」などと真司のことを話しながら私達はサウナに着きました。

私は高温のサウナ

に長時間入るのが好きで、20分ぐらいは我慢して入っているのが常でした。

始めは正弘も我慢していましたが、10分程で出

てしまいました。

風呂の方には他の人もいましたが、

サウナ室には私だけでした。

20分まであと2

分となった時、サウナ室のドアが開き、他の人が入って来たようでした。私は大量の汗をかきながら、下を向いて我慢していたので、全く気にしていませんでした。

ただ、

変だなと思ったのは、座る場所は余っているのに、わざわざ私の横に座ったのです。

それでも私は気にせず下を向いて

我慢していましたが、もう限界だと顔を上げ、立ち上がるうとして横に座った人の顔を見ると、真司が座っていました。

「アレ、今頃ドライブ行ってるはずだよなあ

」。

見間違いかと思い、

再度顔を見ると、やはり真司でした。

「なんだ、予定変わったのか、今、正弘呼んでくるわ。」

そう言つて、私は正弘を呼びに行きました。正弘とサウナ室に入ると真司

の姿はありませんでした。「あんまり我慢すぎて幻覚でも見たんじゃないか？」正弘は完全

に見間違ひと思つてゐるようでしたが、私が座つていた所と、その横には、はつきりと座つていた汗の跡が残つていました。どうも腑に落ちず「なんか変な感じだから、真司の家に電話してくるわ」

そう言つてサウナのフロントから電話をすると、真司の弟の隆司ができました。「ああつ、隆司？兄貴いるか？」「アツ、季里さん、兄貴、事故つて、母さんと父さん病院行つてます。」「事故？どこで？」「千歳に向かう途中の36号線で、かなりヤバイような感じです。」「何処の病院行つた？」「北大病院です。」

「じゃあ、これから正弘と行くわ。」そう言つて、

私達は病院に向かいました。

病院には複数の家族の

方が集まつていました。真司の車には、彼女と友達2人が乗つており、雨でタイヤがロックされ、トレーラーと正面衝突で、女の子達は即死だったそうです。真司は事故後10分程、生きていたそうです。

警察の方がいたので「すみませんが、事故は何時頃だったんでしょうか？」「18時18分ですね」サウナで私の横に真司が座つた時間でした。

最後に私に会いに来たのでしょうか。

テレビではニュース速報が流れ、翌日の新聞は一面トップで報道されていきました。

家族団欒

皆さん

は夕食の時、家族揃つて食事をしますか？それとも1人ですか？でも、どうせなら1人よりは家族でだらんの方が、食もすすむような気がしますよね。ただ、家族だらんというものは、他人に見せたいからとか、見られたいからという訳ではありませんよね。

でも、もし見られていたらどうしますか？
今から20年程前、全国的に痛ましい事件が頻

繁に起こっていました。家庭内暴力という、家族に対しての暴力です。夜もおちおち寝ていられないと、およそ家族の中ではありえない意見まででていました。そして、

とうとう私の住んでいた札幌市でも痛ましい事件が起きました。

札幌市西区H寒、新興住宅街だったその町内には、割とゆとりのある注文住宅が多く、まだまだ発展途上で、車の通りも少なく閑静な町内でした。その中の比較的大きな一軒の家でそれは起きました。

Tさんというその家族は、
両親、長男、長女の4人家族でした。この御両

親は教育熱心で、成績の良かった長女には、できる限り長女の要求に応えていたそうですが、長男には厳しく、話す事といえば、勉強しなさいの一辺倒だったそうです。

長男もそれほど悪い成績ではなかったそうですが、それでも御両親は長女との格差を縮めようとはしなかったそうです。

そして、毎日、毎日、繰り返し同じ事を言われ続けた長男は、ついに、就寝中の御両親を金属バットで撲殺し、長女をも同じく撲殺してしまいました。長男は、

すぐに逮捕され、連日、テレビのニュースや新聞で報道されました。

町内の方達も、この痛ましい事件を口々に噂をし、神妙な面持ちでした。全国、どの地域でもこういう事件があると、周りの方達は、似たような感じになると思います。ちょっと違ったのはこの後からでした。

事件の起きたTさんの隣のYさんというお宅。両親、長女、次女、長男の5人家族。夕方午後6時頃、家族だんらんで夕食をとっていた時、ベランダの窓を「コンコン」と叩く音が聞こえました。物がぶつかった音ではなく、明らかにノックしている音です。

ブロック塀に囲まれている家ですから、おかしいなと思い、旦那さんがベランダのカーテンを開けた

その時、頭や顔面から血が流れている、撲殺されたＴさん夫婦と長女が無表情で、ジッとＹさん家族を見ていたそうです。旦那さんはすぐにカーテンを閉め、警察に連絡しました。

次の日、Ｙさんの向かい側のＫさんのお宅。

4

人家族のＫさん。家族全員が明るく、仲の良い家族です。午後６時３０分頃、鍋を食べながら談笑していると、テレビの電源が急に切れてしまい、テレビに向かって行くと、テレビの後ろの窓から、撲殺されたＴさん達が見ていました。

この現象は近隣の各家庭で収まることなく、結局引越しに次ぐ引越しで、とうとうこの町内に住む人はいなくなりました。

家族だんらんがうらやましかったのか、それとも妬ましかったのか、家族で夕食を食べる時は、窓のない場所がいいかも知れません。

（後書き）

次回は、部屋に関するお話しを書く予定です。
さい。

少々お待ち下

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1715r/>

誰にも話さなかった不思議な体験 4

2011年2月24日20時25分発行